

摩訶衍

(大正十三年十二月廿五日發行)

信行禪師の三階佛法に就いて

伊藤祐晃

凝然大徳の五教章通路記に、大藏經中に三階集錄五卷あり。諸經論の正文を引て教義を成立す、而して前後雜亂始終混同して義意見へ難く、宗旨得難しとの記事あり、然らば當時の大藏經中に此書のある知るべきである。

予が三階教に關する最初の所見は何んと謂ふても記主禪師の選擇傳弘決疑鈔の第十四篇の「此但是佛接引之言、或是遠聲作近聲、說是第二階法、或言別時之意、種々異解不信、即生此の語なり。」

是を聖罔師の直牒に解して、

或是れ遠聲等者、聲者名也、言こゝろは逆者に於て二階三階の別あり第二階の五逆は根利にして障り重きの故に一行を修して往生すべし。觀經の所説是れなり、第三階の五逆は根鈍にして障り重き

の故に普眞普正の法を以て往生すべし、念佛の一行を修しては往生すべからず大經の唯除是也。今の言は五逆の稱の等しき故に第三階の遠き名に第二階の近き名を説くものにして、實には遠き名は生ぜざるなり云々と説けり。

問師に次て稍々詳細なる註解を加えしものは、藤田性心の弟子なる持阿の選擇決疑鈔見聞である。或是遠聲近聲等者とは

信行禪師の事なり、彼師の意は機に三階を立て、法に普別を明す。機の三階とは三賢等は第一階也、十信は第二階也、信前は第三階也。法の普別とは通して諸佛等を念するを普信普正の法と名く、別して一佛等を行するを別信正法と名く、然るに第二階の人は別法を行して得脱し、第三階の衆生は唯だ普法に依て得脱すべき故に、今彌陀を念るは別法也。然るに第三階の機に對して別法を説くは方便の説也。第三階を遠聲と云ふなり、聲とは名なり、此三階に付て三重あり、群疑論第四に云く然るに禪師其三義を以て教を尋ぬ、是れ當根の法門なり、一には時に依り、二には處に依り、三には人に依る。已上

時に依とは、信行禪師の三階佛法集録に云く

大乘經に於て三分を信す、佛滅後初の五百年に第一階、次の五百年第二階、次の一千年第三階時

(已上)
取意)

次に處に依るとは、彼の集録に云く一切娑婆世界を亦一切濁惡世界なりと名く、位を判する是れ一切一乘世界に非ずして唯是れ一切三乘世界なり大集及十輪經の説の如し已上。之に准するに淨土は是れ第一階一乘世界なり、一切娑婆は是れ第二階三乘の世界也、又第三階を兼ね。

後に人に依るとは、集録に云く一切第一階は佛法内一切利根一乘の衆生乃至一切第二階は佛法内一切利根三乘の衆生乃至一切第三階は佛法内一切利根及び空見有見の諸佛化せざる斷善の衆生也、一切最大鈍根^上已。

又云く滅後一千年已後は一切道俗利鈍を問ふこと莫く皆悉く邪見顛倒と名く。唯一切破戒無戒爾處の衆生のみあり^上已。

この論議は源と懷威の群疑論である。群疑論は三祖が決疑鈔に引かれた、或是遠聲作^ニ近聲^一説、或是第二階法^ヲを初として第三卷には問答を施して曰く諸餘の大徳は悞れて經文を解すべくとも、信行禪師の説は是れ四依の菩薩なり、寧ぞ此聖教に於て亦謬解あるべけんやと尋ねて、之を釋して三階の謬解を返駁しつゝ第四卷に渡り

然るに禪師は其三義を以て教を尋ねて是れ當根の法門なりと、一には時に依り、二には處に約し、三には人に准す、詳かに禪師此三門を立て、諸の教意を求む、謂ふべし妙は即ち妙なり、能は即ち能なり焉、義半滿を兼ね、法門の巢穴を窮め、眞乘の秘藏を究むと雖ども、未だ禪師の如く宗旨を判す

るものは有らず。然るに禪師自ら其義を立て、而も自ら其趣に乖けり。何んとなれば

觀經に言く、如來今日韋提希及未來世の一切の凡夫の煩惱の賊の爲に害せられる者を教て、清淨業を説くと、及び未來世とは惡時也。爲煩惱之所害とは惡人也。此れ茲の穢土を教化するは惡處也、然れば此經に斯の三義を具せり、計るに是れ當根の佛法なり、禪師當根ならずと言ふ何の意ぞや。維摩經の八法は、未來世の爲なりと言はざれば惡時に非ざる也、菩薩八法を成就すと云へば惡人に非ざる也、唯茲の穢土を化する事有るのみ、是れ惡處也、此經には斯の一義あつて彼の二門を闕く而して當根と言ふは何の義ぞや。

と道が懷感論師なり、此一矢には四依の居士たる信行も恐く地下に根顔の至りなるべし。

三祖の門人乘圓道忠は、群疑論探要記を作り其第六卷に續高僧傳の信行傳を引て其行實を詳述せり今夫に倣ふて彼れが閱歷の一斑を紹介せば、

釋信行、姓は王氏魏郡の人なり、其母久しく子なし佛に就て祈誠す。夢に神、兒を擎げて告て言く我今持して以て相與ふと寤已に覺て常日に異なり、即ち娠あり、行の生るに及んで性恒に殊なり、年四歲に至り路に牛車の泥に没し牽き引くを見て、因て悲泣して止まず、八歲既に博く經論に涉り情理趣に攀す、時を以て教を授す、病を以て人を驗じ、自ら藥を知り輕病重理、勤苦を加え力を竭して之を治す、凡そ影塔あらば皆周行、禮拜遶旋、翹仰して因て來世佛を敬ふの習と爲す、斯一行を

方に鐫勒塔所に樹つ、即ち至相寺の北巖の前、三碑峙列するもの是なり。

初め信行の異迹を勃興するや、時に或は譏を致す通論に詳なる所、未だ甄別すべからず、但し奉行剋峭偏薄不倫なり、佛宗に至ては亦萬衢の一術なる耳、著す所の集記並に正文を引く、然るに其題を表し名を立る定れる准的なし、對根起行と曰ふと雖も、幽隱躰を指して標榜すれども事を語る潜淪なり、來哲の儻詳にして幸に據るあることを知れ。開皇の末歲勅斷して行はず、別に本傳あつて世に流る、費節の三寶錄に見ゆ。已上

五教章の上に云く梁朝光宅寺の雲法師に依て四乗教を立つ、謂く臨門の三車を三乗と爲し、四衢に授くる所の大白牛車を方に第四と爲し、彼の臨門の中の牛車も亦羊鹿に同じ俱に得ざるを以ての故に、餘の義は上に辨するが如し。後代の信行禪師此宗に依て二教を立つ、謂く一乗と三乗となり、三乗とは即ち別解別行及び三乘差別なり、並に先に小乗に習ひ後に大乘に趣く是也。一乗とは謂く普解普行唯是れ一乘なり故に知ぬ、信行は梁の光宅寺の法雲法師の流徒なるのみ。

自鏡錄に云く惡、神都福光寺の僧某、一時に忽然として業道の中に逐ふ、信行禪師を見るに大蛇の身と作れり、遍身惣して是れ口なり。又三階を學ぶ人の死を見れば、皆此身の口中に入る、去る處を知る莫し、其僧却て活る此に因て京に來向して、僧靜禪師に報す、僧靜信せず、遂に即ち却て都に歸向す矣已上僧靜の信せずるは應に禪師の徒なるべし云。

歴代三寶記、開皇十七年費長房、初めて信行の選述を大藏中に列す、而して後同二十年制斷して流
行を聽さす。

自鏡錄又云く慈門寺の僧孝慈、年五十なるべし、幼少より已來、信行禪師の三階の佛法を説くを聽
きて苦行を修す。毎に三階の佛法を説いて言く大乘經を讀誦すべからず、讀誦する者は十方の阿鼻
地獄に入る、須らく懺悔すべし、後に一時岐州に在て三階の佛法を説く、時に一の優婆夷あり法華
經を持てり、又有縁を勸めて同しく法華經を持せしむ、其禪師彼の法華經を持てる優婆夷等に勸め
て言く、汝等法華經を持すも根機に當らざれば地獄に入るべしと、勸めて誦を捨てしむ。遂に數箇
の優婆夷あり法華經を持することを捨て、禪師の處、衆の中に於て法華經を持てる罪を懺悔す。
其元首法華經を持つことを又た勸む。優婆夷、情の中に合せず、遂に大齋日に於て禪師衆の爲に三
階の佛法を説く、此時に當りて座下に萬人以て來れり。其優婆夷大衆の中に於て香を燒き願を發し
て言く、若し某乙、法華經を持することを佛意に稱はざれば願くは某乙見身に惡病に着て大衆をし
て共に法華經を持すれば此罪報を得ると知らしめ玉へ。又願くは生身に阿鼻地獄に陥て願くは衆を
して同く見せしめ、若し某乙法華經を持つこと佛意に稱順せば禪師も亦爾なるべしと、此優婆夷發
願の時に當て、其禪師音を飲んで語らず、高座の上に面して集録を唱る者も亦音を失して語らず、
更に五箇の老禪師あり亦音を失して語らず、其先きに法華經を誦するを捨てたる數人此に因て更に

發心して法華經を誦する愆重を生ず。已上

當に知るべし、信行は自損々他智者誰か悲まざらむや、實れども而も飽ざるをや、十五家の中に誤の最も重きこと斯より甚しきは無し、今廣く徴破す。

前章は我が内典を中心とせる、若しくは最も手近かなる材料に於ける、三階教に關する其大要である若夫れ各宗に通する典籍を廣く考覈すれば恐くは際限なかるべし、唯自鏡録の信行大蛇身となれりとの説と、孝慈の閱歷とは永く諸宗に通せる説話なりと見えて、悲むべし信行傳の全斑であるが如く墮傳さるゝに至れり、法然上人を彈劾せる、南都興福寺奏狀九個條中にも左記の文がある。

昔信行禪師之立三階行業。孝慈比丘之止一乘讀誦全不輕大乘、量末世機制止其行。然信行成二大蛇身、百千徒衆住其口中、孝慈當鬼神之害、士人同類忽臥高坐下、謗大乘業罪中最大、雖五逆罪復不能及、是以彌陀悲願引攝雖廣、誹謗正法捨而無救。於戲西方行者所憑在誰乎。と又日蓮の撰時鈔には

漢土の三階禪師の云く教主釋尊の法華經は第一第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普經なり。法華經を今の世に行せん者は十方の大阿鼻獄に墮つべし。末代の根機にあたらざるゆへなりと申て六時禮懺、四時坐禪、生身佛のごとくなりしかば人多く奪みて、弟子萬餘人ありしかども、わづかの小女の法華經をよみしにせめられて當坐には音を失ひ、後には大蛇になりて、

そこばくの檀那弟子並に小女處女等をのみ食しけり。今の善導、法然等が千中無一の惡義もこれにて候也。

同書又云く

眞言の善無畏、禪宗の三階、淨土の善導等、佛教の師子の肉より出て來る蝗虫の比丘なり、と

日蓮に限らず、由來信行を語るものは大概この自鏡録の孝慈傳をも信行の事蹟に混淆誤讀して惡罵すること例に依て例の如し。然り而して信行は天台の智者大師とは四歳の年少にして大師より先づ二年に寂す、道綽禪師に兄たること二十一歳、三論の大成者嘉祥寺の吉藏より八歳の長にして淨影寺の慧遠に弟たること十八歳。梁の武帝の大同七年に生れて、隋の開皇十四年正月四日世壽五十四歳の卒である。

凝然、乘圓、日蓮、當時の大藏經中には、三階集録なる五卷が存在せることは以上の記述によりて明瞭である、然るに現藏中に於ては歴代三寶記 續高僧傳等に其名を掲ぐるも、三階集録の全卷は久しく散逸して在らず、然るに曩年増上寺の譽の挫僻打磨編を讀むに其中に予嘗て三階集録を見る、其體頗る相類し、蓋し是れ僻解者流の風格なる耳。

又云く

凡そ見に邪正あり、邪僻にして能く一家を立つ者古來少からず、且く其一を出せば彼の三階の魁首

たる信行等の類の如き是なりと、の

文あり統譽圓宣は安永、天明頃の人、其時三階集録を見ると號す、大に審かし、聞く奈良正倉院聖語藏御物中に二卷ありと、又法隆寺書庫に兩卷ありと、而して龍谷大學之を謄寫するも合して四卷の缺本たるを免れすと。かゝる事情を以て到底此書を手にし信行の思想を直接窺ふことは不可能の事と観念せり。

然るに圓宣之を見たりと傳ふ、彼は増上寺五十二世、享保三年の生で寛政四年七十五の寂なれば今より凡そ百四五十年前の人にして少壯京地に研鑽せるの經歷を有す、或は此地にあるやも知らずと昨秋關東の大震災に就き東大書庫焼亡に關する談話の序、是を某博士に告ぐ、未だ幾ならず本年初春の交、博士予に教ゆるに當地臨濟宗興聖寺より、信行の三階佛法五卷出づと、予欣懷甚し、是を借覽謄寫の機會を得たり。茲に於て統譽の所謂其體頗る相類すと言ふは今果して那邊まで之を知るべきにや。仍て一讀過眼類似點の大要を列舉すること即ち左の如し。

信行禪師と親鸞上人

三階教と浄土真宗と云べきか、信行禪師と親鸞上人と謂はうか、成程似た點は少くはない、第一信行禪師と親鸞上人は其類似點の最初は捨戒そのものである其動機なり、旨趣に於ては大なる相違ありとするも捨戒そのものは恐く同一とは云はねばならぬ、信行の捨戒は今日の勞働者の如く親ら勞役に

服し之を諸悲敬に奉仕すると云ふので、單衣節食、一日一餐で實に時倫に挺出したと云ふのであるから、一燈園式の勞働托鉢の様なものであつたらしいのである。そこで究極極まる具足戒は到底護持することは出来ぬ筈である、親鸞のは、承元丁卯の歳、本師源空法師並に門徒數輩、罪科をかながへず、みだりがはしく死罪に坐す。あるひは僧儀を改め、姓名をたまうて遠流に處す。予はそのひとつなり、然れば既に僧にあらず俗にあらず。この故に禿の字をもて姓とすと謂ふのである。其主旨には相違あつても、僧侶一般の戒法を捨てた點が最も能く酷似して居る。

第二は信行は對根起行を最大主眼として、破戒持戒、利根鈍根を問ふことなく、應病與藥の教旨を標榜し、所謂、幽隱牀を指して事を語る最も潜淪なりと評せられた如く、巧は則ち巧、妙は頗る妙にして衆萬人を集めて、其言を頂受せられざること莫く、直に從來の章疏を擲つて其化に従ひ、稟けて師父の禮を爲さすと云ふことなしと謂ふのであるから、其一時の化導の盛は、蓋し非常なものであつたことを想像するのである。親鸞の關東から歸京してから、九十歳入寂に至るまでの稍々長日月の消息は杳として知れぬが、關左に於ける化導は頗る之に類するものがあつたらしいのである。信行が京師に於ける、化度、光明、慈門、慧日、弘善等の五寺を置くと云ふ盛大はなくとも、滅後、覺如存覺時代の活動に至つては恐らく又信行も遠く及ばぬ程であつたものではあるまい歟。對根起行と信心爲本とは主張に於て稍々相違あるも一世の人氣を集め、其下層民に一大印象を與へ、一代を風靡せし點が

願る酷似して居ると思ふ。

第三は信行も親鸞も俱に同行主義が一致して居る歎異鈔に親鸞は弟子一人も持たぬ。其故は我計ひにて人に念佛を申させ候はゞこそ。弟子にて候め。偏に彌陀の御催にあづかりて念佛申し候人を、我弟子と申事、極めたる荒涼のことなりと云へり。之れ一名門徒宗の起る所以で、此宗旨にして此主義を採る最も巧妙なりと思ふのであるが、信行は隋の開皇年中既に此説を説いて居る一切善知識を求め一切衆生を度するに唯同行第一であり、常隨喜第二、常見第三、常聞第四、常求第五と稱し一切衆生と八戒等の行を一日一夜身口意等一切相捨離せず。又一切衆生と五戒八戒二百五十戒等の行を同行して盡形まで身口意等一切相捨離せず、一切菩薩戒行等も同行して乃至成佛三大阿僧祇劫、身口意等一切相捨離せず、持戒同行する亦是の如しと云へり。信行の捨戒の動機は此等あらゆる機類と共に諸種の修行を同行同修するには、具足戒を嚴守することは到底不可能であると云ふ見解で先づ自ら捨戒せし點は精神的にも一切衆生に對する勞働奉仕の意味は充分知らるゝのである。

今日より批評すれば信行の教相に於ける大なる缺陷は大乗と小乗とを混淆せるの失であるが、是れは當時未だ今日の如く大小乗が判然區劃せられず、ありし時代に於て、信行が此點を混用し前後雜亂宗旨得がたしとの批難を蒙むるも亦無理からぬ事體と謂はねばならぬと思はるゝのである。茲に於て信行は一種相似と云ふ都合の能き判釋語を屢々使用して居る次第である。

第四には信行も親鸞も、均しく在家布教が所詮であるからでもあろうが俱に山林寂靜なる地點を避けて、概ね聚落に出で、教化に努力して居ることである、剃頭染衣、山林閑寂にあつて修行する所謂小乗的の苦行は信行の最も忌避する處で彼れは

「常に山林閑靜に在つて野獸の如く死す」

と嫌つて居る、何故なれば

「一切三寶等の諸種の業務も總て是れ一切聚落内が最も多きが故なりと」

稱して居る、其標標する對根起行は素より應病與藥の相當對治を主眼とすれば、自行よりも寧ろ化他を以て本旨とする當然の主張と謂はねばならぬ歸結で、是れ鎌倉時代の親鸞が非僧非俗を標榜して、専ら在家救済に成效せる一面の眞理である。

第五は俱に教相判釋に複雑と混亂を免れぬ缺點である。信行は機法俱に之を三階に分別することは言ふ迄もなき處ながら、法に別眞別正と普眞普正の二を分類し。時。處。人の三類に據て得益の異同を區劃せり、其内娑婆世界を以て絶待濁惡の三乘世界なりと判するのである。是れ親鸞の末世濁亂の世界には念佛の絶待他力の外、凡夫には少分の諸行をも許さず、廻向の力用をも皆彌陀より賜ふものであると謂ふに似て、此處に彼此共に特長もあり亦缺陷も生するのである。

信行は普眞普正の自分の主張を飽迄骨張せんが爲めに娑婆世界を絶待濁亂なりとすると共に三乘を

以て破戒無慚の凡夫と同一視するの缺陷を生するのである、佛滅後一千年以後の衆生は絶待破戒無慚のものにして、三賢十信は第一第二階に相當し、別眞別正の一佛を行するは、滅後一千年以後の修行に相當せずと斷じ、其普眞普正の法のみ末世相應の一法なりと主張するのであるから、淨土門の別眞正法とは恰も正反對となる譯である。

因に謂ふ、以上は謄寫しつゝ一讀過眼其梗概を記するのみにして缺點の多き素より謂ふ迄もなし、幸に大方の示教を乞ふのみ。

又云く、大正六七年の頃、辱知矢吹慶輝氏、三階教に關する該博なる考證を哲學雜誌に發表せらるる蓋し英京倫敦博物場、燉煌發掘品に基き講述せらるる其教義の詳細は悉く同氏の博識に譲る。

大正十三年十一月廿日記